黒潮町の文化財 No.5

『有井庄司』

■有井庄司の人物

有井庄司は三郎左衛門豊高と称し、有井川の庄司です。

庄司とは荘司（領主の命を受け荘園を管理した職の人）のことで、この時代幡多地方は、一条家の荘園でした。

彼の人柄は誠心誠意あくまでも素志を貫くといったふうな人物であったと思われ、王無の浜での尊良親王の出迎えに大平弾正の後手を打ったその後も、王野や米原の仮御所での親王への終始一貫した忠誠ぶりでも想像されます。

また毎年旧暦7月16日夜（新暦8月16日）に行われる庄司供養の盆踊り「しょうじんおどり」が今に伝わっていることにも、地元の人に慕われている彼の人柄がよく表れています。

※昭和47（1972）年11月3日、大方町無形文化財に指定。

■庄司の墓

土佐での長い生活を終えた親王は、やがて帰京を果たし、「土佐の配所3年の夢にまつわるものは庄司が忠勤の思い出である。京に上れば重き褒美を取らせん」と、使者をなんども庄司の館に送りましたが、老いを理由に庄司は辞退を重ねました。やがて彼の訃報を耳にすると、親王は「哀れな庄司よ」と供養の塔を八反帆の官船に満載して、庄司の墓上に手向けられました。

墓は土佐くろしお鉄道有井川駅近くの八幡社の境内にあります。丘陵の先端部に位置し、数十基の五輪塔やその他の石仏によりなっています。

※昭和3（1928）年、高知県史跡に指定。

■彼を取り巻く人々

【尊良親王】

元弘2（1332）年3月下旬、京より土佐に流され、王無の浜に着き京に帰るまでの1年余りの歳月を、庄司の手厚い警固で過ごしました。

【大平弾正】

庄司と共に親王を守り、二忠臣と呼ばれました。

親王が王無の浜に着いた時、最初に出迎えながらも、途中でその任務を庄司に移しました。

【千代】（伝説）

人里遠く離れた王野の山峡で、不自由な、寂しい配所の月に泣く親王に、日々食べ物を持っていく役目の里娘・千代がいました。

千代は庄司の館から、毎夜人目をしのんで、一番鳥の泣くまでに、暗い山道をたどりながら、王野の仮御所に食べ物を届けていました。

千代は時刻を知るために、いつも鶏を懐に抱いて通っていました。ある夜更け、まだ仮御所に着かないうちに懐の鶏が暁を告げたため、時刻に遅れた自責の念にかられた千代は、仮御所に近い里の谷の淵に身を投じたといわれます。

今、この渓流の岸辺に、里人によって「千代の碑」が建てられ、この淵は千代が淵と呼ばれています。

碑文

若草の萌えよみがえる千代が淵

○このシリーズに関するお問い合わせ　黒潮町教育委員会 文化振興係（大方あかつき館内）☎43－2110（直通）